

2022年度福祉社会開発研究センター研究紀要

資 料

活動報告

東洋大学福祉社会開発研究センター 活動報告

(分) = 研究分担者、(協) = 研究協力者、(RA) = リサーチアシスタント

I 合同活動の報告

1 東洋大学福祉社会開発研究センターシンポジウム等

(1) キックオフミーティングの開催

日 程：2022年4月24日

会 場：オンライン

報告者：各ユニット長

概 要：センター関係者のみでのキックオフミーティングを開催した。2022年度の研究体制、予算、各ユニット・グループの研究活動計画を共有した。特に各ユニット・グループ間での協働研究の必要性が再確認された。

(2) 2022年度前期シンポジウムの開催

日 程：2022年9月25日

会 場：オンライン

テーマ：福祉実践における科学技術活用のこれから

基調報告：香取幹 氏（株式会社やさしい手 代表取締役社長）

事例報告：藤木聡美（分）、大川秀治（客／一般社団法人オンラインボッチャ協会 代表理事）

コメンテーター：稲沢公一（分）、横田祥（分）

コーディネーター：加山弾（分）

概 要：香取氏より、基調報告として介護現場におけるICTを活用した事例について報告が行われた。その後、藤木（分）より現在、本センターで取り組んでいるOriHimeを活用した医療的ケア児への支援に関する概要の説明、大川（客）より、東洋大学学生も参加しているオンラインボッチャの取り組みについての説明が行われた。以上の事例を受け、稲沢公一（分）と横田祥（分）、それぞれの専門の立場からコメントがあった。

(3) センター内年度末ミーティングの開催

日 程：2023年1月23日

会 場：オンライン

報告者：各ユニット長・グループ関係者

概 要：センター関係者のみで、今年度の研究成果、今後の研究方針を共有するためのミーティングを開催した。各ユニット・グループの研究内容の共有が行われた。

(4) 2022年度年度末シンポジウムの開催

日 程：2023年3月12日

会 場：オンライン

テーマ：『内なる国際化』と福祉実践におけるICTの利活用

主 催：東洋大学福祉社会開発研究センター

共 催：科研費「福祉社会における新たな価値の創発と支援システムの構築」（研究代表：志村健一）

報告者：荻野剛史（科研費）、内田千春（分）、藪長千乃（分）

概 要：現在の日本では、いわゆる超少子高齢社会・人口減少社会の到来に直面しつつ、外国人労働者の受け入れ等が進められようとしている。その際、どのような受け入れ体制が求められるのか、受け入れにともない福祉サービス供給体制がどのように変化していくのか、また、多くの外国人や外国にルーツをもつ人々の生活支援のためには、どのような仕組みづくりが必要なのか、あるいは、言葉の壁や文化の違いにどのように対応していくかといった課題がある。そうした現状を踏まえ、外国人介護労働者の受け入れ等に関する課題、保育園等におけるICTの活用、生活支援における政策的課題について、報告が行われた。

2 紀要『福祉社会開発研究』第15号の発行

部 数：250部

内 容：論文他 13本

概 要：本センターの研究分担者・客員研究員・研究協力者らが執筆した論文等を掲載した紀要を大学等関係機関・センター関係者に配布し、研究内容・研究成果の一端を示した。

3 東洋大学福祉社会開発研究センター広報活動

(1) ニュースレターの発行

第1号：2022年 7月発行

第2号：2022年 10月発行

第3号：2023年 1月発行

第4号：2023年 3月発行

(2) HPの更新

ニュースレターやシンポジウム等の告知を随時掲載し、情報発信に努めた。

4 センターの運営

(1) 評価委員会の開催

日 程：2022年3月17日

会 場：オンライン

(2) センター会議の開催（すべてオンラインでの開催）

第1回センター会議：2022年4月7日

第2回センター会議：2022年6月20日

第3回センター会議：2022年11月25日

II 各ユニットの活動報告

理論研究ユニット：歴史・原論グループ

1 研究会の開催

第1回研究会

日 程：2022年6月6日

会 場：オンライン

報告者：門下祐子（客）

テーマ：知的障害児・者の『性の権利』尊重のための教育および支援に関する研究

概 要：知的障害のある子どもが通う特別支援学校高等部での性教育、就労支援事業所での性に関する支援の実態などについて報告があった。知的障害のある本人の「性」に関するニーズを明らかにした。

第2回研究会

日 程：2022年10月10日

会 場：オンライン

報告者：稲沢公一（分）

テーマ：福祉の論理

概 要：福祉の論理では、社会科学一般にみられる帰納的方法ではなく、演繹的方法が採用されている。私たちが生きていくうえでの基本方針には、市場ルール： $R \rightarrow R + a$ と福祉ルール： $\text{非}A \rightarrow A$ がある。そして、それらを根底で支えている論理が「 $A=A$ 」形式論理と「 $A=\text{非}A$ 」福祉論理である。この二つのルール（論理）を中心に、その成り立ちなどについて、報告が行われた。

第3回研究会

日 程：2022年12月26日

会 場：オンライン

報告者：形岡拓文（客）

テーマ：福祉理論において論ずるべき価値観について（試論）

概 要：障害者の権利を基礎づけるための価値について報告が行われた。現在の社会科学では、基礎に経済学的思考＝交換の思考があり、貨幣に換算されない（することができない）存在の価値が捨象されてしまっている。そのため、福祉実践の内から新しい価値の創造を行い、社会に還元していく必要がある。

反出生主義や優生主義の考え方が広まっていく中で、存在そのものの価値をどのように捉えなおしていくか議論が行われた。

第4回研究会

日 程：2023年1月19日

会 場：オンライン

ゲスト：亀井憲樹 氏（慶應義塾大学経済学部教授）

テーマ：社会的ジレンマでフォーマルな罰則をいつ遂行すべきか？

概 要：第4回研究会では、行動経済学を専門とする慶應大学の亀井教授をお呼びし、実験から得られた実証的データに基づいた報告が行われた。具体的なテーマは、自己制御資源と規制の関係についてであり、結果は、自己制御資源が十分にある場合は、インフォーマルな罰則により協力を実現するが、自己制御資源が摩耗した場合は、フォーマルな罰則により協力を実現するというものであった。簡単に言い換えてしまえば、人は疲れている（自己制御資源が摩耗した状態）とき、自分では考えず、ルールに頼るといふものであり、私たちの日常的な実感とも合致する。実験という方法論や心理学的概念について、さまざまな観点から議論が行われた。

第5回研究会

日 程：2023年3月2日

会 場：オンライン

報告者：小林良二（客）

テーマ：関西出張に関する報告

概 要：地域福祉におけるAI分析の可能性や重層的支援体制整備事業に関して、報告が行われた。今後、地域づくりのためには様々なデータの活用が必須だが、個人情報取り扱いや共有など、課題があるとの指摘があった。

2 視察・研修会参加等

(1) 日本社会福祉学会第70回秋季大会への参加

日 程：2022年10月15日～16日

場 所：関西福祉科学大学

参加者：形岡拓文（客）

概 要：①思想・理論セッションと、②障害児者福祉セッションに参加した。福祉が基礎づけられるべき規範に関する議論や障害者福祉を支える規範そのものに関する議論は少なかった。福祉に関する規範について興味関心を抱いている研究者と意見交換と関係構築を行った。

(2) 大阪公立大学 山野則子研究室・堺市社会福祉協議会・天津市社会福祉協議会の視察

日 程：2022年12月7日～12月9日

訪問先：①大阪公立大学 山野則子研究室

②堺市社会福祉協議会、③大津市社会福祉協議会

参加者：小林良二（客）、上西一貴（客）、劉鵬瑤（協）、浦田愛（協）、榎本涼子（協）、水上妙子（協）

概要：①では、学校プラットフォームの考え方、AIによるスクリーニングの運用等について話を聞くことができた。AIによる分析は、まだ学習が十分ではなく、現状では教師の判断データの蓄積を行っている段階である。②③については、それぞれの重層的支援体制整備事業の準備状況等について、話を聞くことができた。

3 論文・学会発表等

（書籍）

書名：福祉の論理—「かけがえのなさ」が生まれるところ

著者：稲沢公一（分）

出版社：誠信書房

出版日：2022年8月30日

（論文）

題目：コーディネーターの個人支援における直接支援・間接支援とネットワークについて
—文京区社協地域福祉コーディネーターの取り組みから—

著者：榎本涼子・近藤秋穂・小林良二（客）

書名：日本地域福祉学会『地域福祉実践研究』第13号

出版日：2022年5月31日

題目：「知的障害者の性的表現・行動に対する態度尺度」の構成要素
—スコーピングレビューに基づく尺度項目の検討—

著者：延原稚枝・門下祐子（客）・武子愛・酒井理香・名川勝

書名：日本社会福祉学会関東部会『社会福祉学評論』第23号

出版日：2022年

題目：日本におけるソーシャルファームという「つながり」についての一考察
—イタリア、イギリス、ドイツにおけるソーシャルファームとの比較を通して—

著者：村川真一（協）

書名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

題目：障害者福祉施策における現行の支援の枠組み

著者：奥西允（RA）

書名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

（学会発表：国内）

題目：就労移行支援事業所および就労継続支援A型・B型事業所における知的障害者の性的行動に対する職員の意識と支援の課題

報告者：門下祐子（客）

学会：日本職業リハビリテーション学会第49回宮城大会

日程：2022年8月28日

概要：全国の就労移行支援事業所および就労継続支援A型・B型事業所における知的障害者の性的行動に対して支援を行っていない/できない職員の意識や実践現場での課題等についての調査結果を報告した。

題目：知的障害者が語る、『性』に関する経験やニーズ
特定課題セッションⅠ 障害×女性と社会福祉・性と生殖をめぐって

報告者：門下祐子（客）

学会：日本社会福祉学会第70回秋季大会

日程：2022年10月15日～16日

概要：まず知的障害女性が複合差別の状態に置かれているという前提が共有された。知的障害女性の「性」や生殖をめぐる議論において、社会規範や支援者の視点が重視されれば、本人の意思や性的行動が「保護」という名のもとで抑圧されるおそれがある。したがって、当事者の「性」に関するニーズおよびニーズを表明するプロセスに着目した本研究のデータをもとに、今後の議論を発展させていく必要性を感じた。

題目：知的障害男性と知的障害女性に対する支援者の性的態度
自主シンポジウム 知的障害者の性的表現・行動に対する態度尺度

報告者：門下祐子（客）

学会：日本発達障害学会第57回研究大会

日程：2022年12月24日～25日

概要：報告者が参加する研究会にて、国内における知的障害者に対する性的態度の測定を目指し、Cuskelly, M. & Gilmore, L.(2007)のAttitudes to Sexuality Questionnaire Individuals with an Intellectual Disabilityの邦訳版に日本のコンテキストに基づく追加項目を加えた尺度の国内における予備的調査を行い、その妥当性・有用性を確認した。その後、構成要素の把握のために、尺度項目の質的分類を行った。これらの予備調査に基づき、知的障害者の支援者および一般人に対して知的障害者の性的態度尺度を用いた質問紙調査を実施し、結果を報告した。

(学会発表：海外)

題 目：「相互承認」の場の形成に関する思想史研究

A Historical Study of Thought on the Formation of Places for Mutual Recognition

報告者：金子光一（分）

学 会：中国社会学学会社会福祉研究専門委員会年次総会（厦門大学）

日 程：2022年12月27日

概 要：ロバートオウエンの協同社会の基礎に「相互承認」の場があったことを、彼の思想に着目して明らかにした。また、近年の社会状況から相互に認め合う社会を構築する必要性を論じた。考察の結果、オウエンが考えた「道徳的徳性」の教育が、その価値・規範の涵養のために構想されたものであり、「相互承認」の場の根底にあることが解明された。また、相互に認め合う「相互承認」が、一人ひとりがつながり『豊かな』社会を構築するための価値と結びついていることが判明した。

理論研究ユニット：政策論グループ

1 研究会の開催

第1回研究会

日 程：2022年11月2日

会 場：オンライン

報告者：藪長千乃（分）

テーマ：フィンランドの保健医療福祉改革について：広域政府の設置のプロセスと展望

概 要：フィンランドでは、2023年1月1日から新たに広域政府が設置される。なぜ新たに広域政府が必要となったのか、広域政府の設置は何を目指しているのか、何が改革を実現させたのか等について報告が行われた。改革の背景には、長期にわたる段階的な地方制度改革プロセスや改革が促した先行事例の蓄積が存在していた。

第2回研究会

日 程：2022年11月10日

会 場：オンライン

報告者：伊奈川秀和（分）

テーマ：船員の社会保障における相互承認

概 要：船員保険に焦点を当て、社会保障における相互承認について議論された。歴史的検討から、船員保険は、船員の社会的承認及び船舶共同体に基礎を置く相互承認を具体化したものであるということが明らかとなった。職住一体等の面で自己完結性を有する船舶に着目した船舶共同体を基礎に保険者を構築する船員保険は、今後の保険者機能を考える上での好事例といえる。

2 論文・学会発表等

（書籍）

題 目：The welfare state and COVID-19 countermeasures: the relationship of trust and cooperation between citizens and their government in Sweden and Finland

著 者：Yabunaga, C. and Watanabe, M.

書 名：Public Behavioural Responses to Policy Making during the Pandemic: Comparative Perspectives on Mask-Wearing Policies, p.76-104.

出版社：Routledge

出版日：2022年11月

題 目：地域における相談支援の権利を考える

著 者：秋元美世（分）

書 名：相談支援の法的構造, p.53-71

出版社：信山社

出版日：2022年6月

（論文）

題 目：船員の社会保障における相互承認

著 者：伊奈川秀和（分）

書 名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

（学会発表）

題 目：福祉国家の構造的再編の展開
—フィンランドにおける新たな地方政府の設置に焦点をあてて—

報告者：藪長千乃（分）

研究会：社会政策学会第145回大会

日 程：2022年10月8日

（研究会）

題 目：船員保険制度の現代的意義を考える－船員の保険適用に関する考察－

報告者：伊奈川秀和（分）

研究会：東京社会保障法研究会

日 程：2022年5月28日

概 要：総合保険として創設された船員保険が、産業構造の変化、外国人船員の乗船等の厳しい時代環境の中で、相互承認としても捉えられる保険集団が維持されていることを再評価する研究内容を報告した。報告

では、特に外国人船員等への適用問題を中心に検討した。

理論研究ユニット：対象論グループ

1 研究会の開催

第1回研究会

日 程：2022年6月6日

会 場：オンライン

報告者：萩野剛史（分）

テーマ：介護施設における外国人介護士にまつわる課題分析

概 要：実質的な外国人労働者の導入が始まってから30年以上が経過してなお、外国人労働者の受け入れについては、課題が山積している。特に介護領域では在留可能期間を満了することなく帰国する外国人介護士が続出している。課題を改善していくためには、帰国の理由を丁寧に拾い上げることや外国人介護士の導入プロセスを明らかにすることが必要となる。

第2回研究会

日 程：2022年8月1日

会 場：オンライン

報告者：川原恵子（分）

テーマ：日本における居所不安定女性のホームレス化過程

概 要：女性のホームレス化過程をテーマとした実証研究に向けて、その問題意識や先行研究、研究計画について報告が行われた。日本の公的な「ホームレス」の定義から範囲を広げることにより、今まで見落とされてきた女性や家族の居所不安定層を捉え、かれらの居所の不安定化のプロセスを明らかにする必要がある。

第3回研究会

日 程：2022年10月3日

会 場：オンライン

報告者：戸井宏紀（分）

テーマ：再犯防止とウェルビーイング：アジアにおける司法実践と価値の研究

概 要：今後の研究実施に向けて、その問題意識や研究計画について報告があった。現在、地域共生社会実現に向けた取り組みの一つとして、再犯防止を捉えていくことが求められている。そして、刑事司法と社会福祉の制度・政策がこれまで以上に相互に影響を及ぼし合う状況のもと、再犯防止とウェルビーイング実現という司法と社会福祉の価値・目標がどのような関係にあり、それがアジアにおける司法領域へのソーシャルワーク実践にどのような影響を与えているのかを明らかにする必要がある。

第4回研究会

日 程：2022年12月19日

会 場：オンライン

報告者：佐藤亜樹（分）

テーマ：動物への暴力と人間への暴力の関連性～子どもの権利の視点から～

概 要：動物への暴力（動物虐待）と人間への暴力の関連性というテーマで報告が行われた。現在、人間生活において動物（ペット）と寝食するとともにすることは当たり前の光景になりつつあり、多くの場合、「家族の一員」とみなされている。動物（ペット）と生活を共にすることは、身体的、心理的、社会的な安定に影響を及ぼす。一方で、動物虐待といった課題もある。こうした動物虐待と人間への暴力については、関連がみられることが報告されている。ソーシャルワークの文脈において、動物が主題となることは少ないが、動物の存在が、その背後にある心理的、身体的健康、児童虐待といった問題を早期発見したり、予防したりすることにつながる可能性がある。

2 視察・研修会参加等

(1) 展示会「医療・介護・薬局Week」への参加

日 程：2023年1月18日

訪問先：大阪インテックス

参加者：荻野剛史（分）、久松信夫（客）、小櫃俊介（客）

概 要：第9回医療・介護・薬局Week（大阪）に参加した。外国人介護職員の受け入れについて、現地の送り出し法人を中心に監理団体も含め、口頭で様子を聞く機会を得た。今まではインドネシアやフィリピン、ベトナム等が送り出し国の中心であったが、近年はインドに注目が集まっている理由など、現状が確認できた。また、外国人人材のみならず、介護人材教育に援用が見込まれる、VR、視線把握機器、同時翻訳ツールなど、関係する企業の先端機器や企業の展開なども話を伺うことができた。

3 各種調査・研究

(1) 社会福祉法人たちばな会 特別養護老人ホーム 天王森の郷でのヒアリング調査

日 程：2022年6月20日

訪問先：社会福祉法人たちばな会 特別養護老人ホーム 天王森の郷

参加者：荻野剛史（分）、久松信夫（客）

概 要：外国人介護士の採用のきっかけ、現在に至るまでの取り組み、課題等についてヒアリングを実施した。当初、日本人介護士からの心理的抵抗もあったが、日々の介護業務等を通じて必要不可欠な人材となっていく。彼らも非常に熱心に介護業務をこなし、日本語のコミュニケーションも対利用者、対他職員ともよくとれるようになった。ただ潜在的なコミュニケーション獲得にも課題があり、研修システム構築が今後の課題である。

(2) NPO法人さがみの無料低額宿泊所でのヒアリング調査

日 程：2022年9月9日

訪問先：NPO法人さがみの無料低額宿泊所

参加者：川原恵子（分）

概 要：無料低額宿泊所の利用者2人へヒアリングを行った。ヒアリングシートをもとにヒアリングを行った。現在住んでいる宿泊所に繋がるまでの経緯や幼少期の経験、ライフイベントについて明らかとなった。

(3) 外国人介護士導入のプロセスに関するヒアリング調査

日 程：2023年1月19日

訪問先：社会医療法人愛仁会本部

参加者：荻野剛史（分）、久松信夫（客）、小櫃俊介（客）

概 要：社会医療法人 愛仁会本部参事 坪茂典 氏より、外国人介護人材に対する取り組みについて聞き取りを行った。外国人介護人材の導入の経緯や、その仕組み、課題点や対応方法を詳細に聞き取ることができた。なかでも、タイやベトナムにおける現地での人材教育については、大阪地域の法人のコンソーシアム協定による日本人介護職員の現地派遣・指導などの活動が特徴ある部分といえた。このことは、訪日後の関係性の維持に繋がり、安心した勤務に結びつくなど、法人のみならず外国人介護人材にとってのメリットが感じられた。

4 論文・学会発表等

（論文）

題 目：技能実習生が帰国に至る要因

著 者：荻野剛史（分）

書 名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

題 目：再犯防止とウェルビーイング再考ーリスクからつながりへー

著 者：戸井宏紀（分）

書 名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

実践研究ユニット：高齢グループ

1 研究会の開催

第1回研究会

日 程：2022年7月18日

会 場：オンライン

報告者：勝平純司（分）

テーマ：高齢者の姿勢、動作から紐解く介入方法の提案

概 要：住環境整備が高齢者の姿勢や動作に与える影響、自身で開発した装着型機器が高齢者の姿勢に与える影響について報告があった。本研究会では、医療関係者など24名が出席し、今後どのように高齢者の姿勢にデザインを用いて介入をしていくのかについて活発な意見交換が行われた。

第2回研究会

日 程：2022年10月26日

会 場：オンライン

報告者：ペグ・ジョンウク（客）

通 訳：伊藤 允姫（客）

テーマ：韓国の高齢者福祉の現状と日本との連携の可能性

概 要：韓国における高齢者福祉の現状と、介護の専門職育成について報告が行われた。韓国社会は今後高齢化することが予想されており、住み慣れた地域における介護の専門員が必要になるとして、韓国における介護の専門性の追求と人材育成のためのカリキュラム作成・開発が必要だと指摘した。

第3回研究会

日 程：2022年12月27日

会 場：オンライン

報告者：嶺也守寛（分）

テーマ：スヌーズレンの高齢者施設への普及の可能性

概 要：スヌーズレンの発達史から最新のスヌーズレンの取り組み、認定セミナーのセッション風景も交えて、日本におけるスヌーズレン普及の可能性について報告が行われた。日本でもスヌーズレン教育、資格制度の整備を行い、セラピーの一環として位置づけることが必要であると指摘し、利用者のなじみ深い風景などを取り入れ、認知症高齢者に対するケアの一環としてアプローチできるという今後の研究の可能性が示唆された。

2 視察・研修会参加等

(1) スヌーズレン資格認定セミナーへの参加

日 程：2022年9月6日～15日

場 所：ISNA-Suisse

参加者：嶺也守寛（分）

概 要：①スイスのGrandsonにあるISNA-Suisseのスヌーズレン研修施設において、スヌーズレン資格認定セミナーの2講座を受講し、さらに「沖縄」をテーマにしたスヌーズレンセッションを創作・実施した結果、スヌーズレン国際資格を取得した。これにより、対象者によってスヌーズレンセッションの作り方を
変える重要性を把握し、今後のスヌーズレン研究における知見を得ることができた。

(2) 韓国カトリックサンジ大学との研究交流（第1回）

日 程：2022年12月9日～12日

場 所：カトリックサンジ大学

参加者：古川和稔（分）、ペグ（客）

概 要：韓国の高齢者福祉実践におけるICT活用の現状と、日本との連携可能性のヒアリングを目的に訪韓した。現地の高齢者福祉を専門とする研究者との意見交換を行い、社会福祉を学んでいる学生を対象に、最新の認知症ケアに関する講義を行った。韓国における、介護専門職の専門性およびケアマネジメントの欠如が喫緊の課題であること。ICTの活用については、十分その可能性があることを確認した。

(3) 韓国カトリックサンジ大学との研究交流（第2回）

日 程：2023年2月13日～14日

場 所：カトリックサンジ大学

参加者：古川和稔（分）、ペグ（客）、現地研究者

概 要：2023年度の実施予定の、高齢者福祉施設におけるICT活用状況の日韓比較研究の準備について意見交換を行った。

(4) 韓国中央大学校との研究交流

日 程：2023年2月15日～16日

場 所：韓国中央大学校

参加者：古川和稔（分）、CHOI Young教授（韓国中央大学校）

概 要：韓国の高齢者福祉実践におけるICTの活用に関しては、これまで地方都市の情報しかなかったため、ソウルにある中央大学校を訪問し、都市部の状況について情報収集を行った。

3 各種調査・研究

(1) 要介護高齢者の重度化予防・在宅生活継続に向けたケアマネジメント支援システムの開発

—モニタリング項目抽出のためのアンケート調査—

期 間：2022年5月13日～2022年7月10日

担当者：古川和稔（分）、窪田佳寛（分：開発研究ユニット）

概 要：日本全国の居宅介護支援事業所30,631事業所を、都道府県および政令指定都市別の人口比例配分で割

り当て、無作為に1,000事業所を抽出した。各事業所に3通ずつ、合計3,000人のケアマネジャー宛てに質問票を郵送し642通の有効回答を得た（有効回答率 21.4%）。単純集計の後、開発研究ユニットと連携し、AI（機械学習）による分析を行った。経験豊富なケアマネジャーのグループでは、利用者のADL低下予防の観点から、介護者（家族）の心身状況を、優先度の高いものにとらえていることが分かった。

(2) 韓国の高齢者福祉実践におけるICT活用の現状と、日本との連携可能性のヒアリング

日 程：2022年12月9日～12日

訪問先：カトリックサンジ大学

参加者：古川和稔（分）、ペグ（客）

概 要：韓国の高齢者福祉実践におけるICT活用の現状と、日本との連携可能性のヒアリングを目的に訪韓した。現地の高齢者福祉を専門とする研究者との意見交換を行った。また、社会福祉を学んでいる学生を対象に、最新の認知症ケアに関する講義を行った。韓国においては、介護専門職の専門性の課題、ケアマネジメントの欠如が喫緊の課題であること、ICTの活用については、十分その可能性があることを確認した。これまでのリモート会議では得られなかった、踏み込んだ意見交換ができ、大きな成果を得た。

4 論文・学会発表等

（書籍）

題 目：使ってみよう！スヌーズレン

著 者：監修 全日本スヌーズレン研究会 編著 柳本雄次・大崎博史・遠 直美

書 名：ジアース教育新社

出版日：2022年9月21日

（論文）

題 目：要介護高齢者の重度化予防・在宅生活継続に向けたケアマネジメント支援システムの開発
—モニタリング項目抽出のためのアンケート調査—

著 者：古川和稔（分）・窪田佳寛（分）・石山麗子

書 名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

題 目：通所介護事業所におけるADL改善・重度化予防と前倒し利用の検討

著 者：古川和稔（分）

書 名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

題 目：歩行中のセンターブリッジ型膝装具に作用する荷重の計測

著 者：中野耕助・嶺也守寛（分）・勝平純司（分）・佐喜眞保

書 名：ライフサポート

出版日：2022年12月

題 目：0歳～6歳までの未就学児に対するスヌーズレン実践の在り方

ISNA-Suisseでのセミナーを受講して

著 者：嶺也守寛（分）

書 名：ISNA日本スヌーズレン総合研究所「スヌーズレン教育・福祉研究」第6号

出版日：2023年3月

（学会発表：国内）

題 目：ICTを活用した日韓国際交流プログラムの効果検証

報告者：古川和稔（分）

学 会：第30回日本介護福祉学会大会

日 程：2022年10月9日

概 要：ICTを活用した国際交流プログラムの効果について検証を行った。

題 目：介護福祉実践における固有の技能（シンポジウム）

報告者：古川和稔（分）

学 会：第21回 日本自立支援介護・パワーリハ学会大会

日 程：2022年5月21日

概 要：専門職固有の技能、教育について、介護福祉士、作業療法士、看護師の立場から意見交換を行った。

題 目：特別な配慮・支援が必要な子どもと保護者への遊びを通じた支援のあり方を探る

報告者：遠藤浩之・嶺也守寛（分）・大久保圭子・井上和久

学 会：日本LD学会第31回大会京都 自主シンポジウム18

日 程：2022年10月29日～10月30日

概 要：本シンポジウムでは、幼児への光る絵本や紙芝居の楽しみ方、遊びの空間を構成する親子のコミュニケーションを重視したアイテムの紹介、家庭での親子の遊び状況と遊びの空間の心理的効果について話題提供を行い、フロアの方々とともに新たな親子支援の方向性を探った。

題 目：筋電・慣性センサーを用いたフィードバックとアウトカム評価

報告者：勝平純司（分）

学 会：第38回日本義肢装具学会学会大会

日 程：2022年10月8日～9日

概 要：本シンポジウムでは高齢者や義肢装具使用者に対してウェアラブルセンサーを使用した評価がどのよ

うに活用できるかについて解説した。ウェアラブルセンサーを活用してフィードバックを与えるだけでなく、計測されたデータによって姿勢や動作を評価する仕組みを構築することができるという点についても解説を行った。

題 目：バイオメカニズムを基礎とした知識と技術を普及するために
—装着型機器と計測機器の開発により得た知見—

報告者：勝平純司（分）

学 会：第43回バイオメカニズム学術講演会

日 程：2022年11月26日～27日

概 要：本シンポジウムでは自身で開発した装着型機器と計測機器の開発をどのように進めてきたか、今後どのように発展させるのかについての展望を解説した。これらを組み合わせた介入方法や計測された高齢者や障害者から計測されたデータをどのように今後の開発に活用していくかについても解説を実施した。

題 目：計測機器を用いた動作分析を簡便かつ正確に実施する方法の紹介
—動作分析の臨床応用を目指して—

報告者：勝平純司（分）

学 会：第43回臨床歩行分析研究会定例会

日 程：2023年3月5日

概 要：本学会では高齢者や障害者のデータを計測した上でどのようにデータベースや評価方法の構築にいかすことができるのかについて解説を行った。ウェアラブルセンサーによる評価に加えて、現在取り組んでいるマーカレスモーションキャプチャーによる評価についても報告した。

実践研究ユニット：障がいグループ

1 研究会の開催

第1回研究会

日 程：2022年6月17日

会 場：オンライン

報告者：高野聡子（客）

テーマ：特別支援教育における分身ロボットの利活用の可能性

概 要：特別支援教育制度や制度の枠組みの中で、分身ロボットOriHimeをどのように活用していくのかといった可能性について、先行研究を踏まえ、報告が行われた。

第2回研究会

日 程：2022年9月13日

会 場：オンライン

登壇者：中島寧音 氏（筑紫女学園大学人間科学学科社会福祉コース）

テーマ：寝たきりだからこそ出会えたもの

概 要：本研究会では、実際にOriHimeを使用して大学の授業に参加している中島氏を講師に招聘し、OriHimeパイロットとして分身ロボットカフェでアルバイトをされている様子や、これまでの学校生活をどのように送ってきたのかを説明いただいた。これを受け、教育現場でOriHimeなどのICT/ロボットを使用する価値や可能性、つながりの多様性について、活発な議論が行われた。

第3回研究会

日 程：2023年1月20日

会 場：オンライン

登壇者：①近藤武夫 氏（東京大学）、②坪井清徳 氏（港区障害者福祉課）、③永廣 証人 氏（OriHimeパイロット）

テーマ：①「超短時間雇用について」、②「港区での超短時間雇用の実際」、③「分身ロボットでの短時間就労について」

概 要：調布市、朝霞市、世田谷区、文京区、港区、大田区などの自治体と自立支援協議会、それに社会福祉士会（東京の障害者支援委員会と地区会関係者等）など多くの関係者が参加し、障がいのある人の雇用・就労そしてその支援について、「超短時間雇用」という視点から、新たな方向性を見出せる可能性があることを確認した。これまでの日本型雇用の枠組みが、障がいのある人たちの就労や支援に寄与しづらい構造になっており、「超短時間雇用」を導入することにより、障がいのある人のストレングスとパワーと企業の業務分析からのマッチングが多様性の尊重や就労を通しての意思決定や自己実現に貢献する可能性があり、すべての人の雇用の多様性につながる方向性が確認された。さらにこの取り組みは、地域の商店街や企業等、地域活性化や地域包括ケアにつながる可能性もあることから、上記の自治体との連携による実践研究を推進していく必要性を確認した。

2 論文・学会発表等

（論文）

題 目：農福連携におけるICT活用

著 者：小泉隆文

書 名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

題 目：当事者会に参加する精神障害者の意識変容プロセス

著 者：丸山恵理子（RA）

書 名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

（学会）

題 目：農福連携の実践と一般就労との関連性

報告者：小泉隆文（客）

学 会：日本発達障害学会

日 程：2022年12月24日～25日

概 要：農福連携を実践している事業所において、日常の農作業が一般就労にどのように効果的かを考察した。その結果、体力の向上や、日常の作業を評価されることで、一般就労への意欲がエンパワメントされることを論じた。

実践研究ユニット：地域福祉グループ

1 研究会の開催

第1回研究会

日 程：2022年5月2日

会 場：オンライン

報告者：①早坂聡久（分）、②加山弾（分）・洪心璐（分）・大洞菜穂美（客）

テーマ：①特別養護老人ホームのICT活用に関する調査の今後の予定

②ICT活用に関する都内の社会福祉法人へのフォーカス・グループ・インタビューの今後の予定

概 要：前年度実施した両調査について、今年度・次年度の進め方について検討した。

第2回研究会

日 程：2022年6月20日

会 場：オンライン

報告者：大洞菜穂美（客）・小櫃俊介（客）

テーマ：社会福祉連携推進法人の政策・実践事例について

概 要：厚労省が政策化・法制化を進めている社会福祉連携推進法人について、目的、制度設計、機能等について、事例に照らして報告があり、今後の可能性や課題等について議論した。

第3回研究会

日 程：2022年7月4日

会 場：オンライン

報告者：①洪心璐（分）・大洞菜穂美（客）

②早坂聡久（分）

テーマ：①くろベネットICT利活用プロジェクト実証実験について

②ICT・介護ロボット導入に関する調査研究の方向性について

—2022年度以降の方向性について—

概要：地域福祉分野におけるICT利活用の先進事例として、黒部市社会福祉協議会（富山県）の取組みについて報告した。ICT機器80台、のべ300名による実証実験で、①地域サービス創出実証（総合相談カード、移動案内カード、買い物カード、お助け隊カード、家族カード、地区社協カード、元気だよ！カード）、②地域見守り実証（見守りくろベネット）から構成される。ITをアナログ化して伝えることにより、高齢者と地域（サービス）がつながりやすい配慮がなされ、「支援者の使いやすさ」がめざされており示唆的であった。その後、特養のICT活用に関する調査、FGIの継続調査の方向性について議論した。

第4回研究会

日程：2022年9月2日

会場：オンライン

報告者：加山弾（分）

テーマ：社会福祉法人の地域公益活動に関する研究

概要：2010年代以降の社会福祉法人制度改革や地域共生社会政策の展開の中で、地域における公益的な取り組み（地域公益活動）に関する政府・中央機関等の文書・資料や学説を概観し、「理論・政策」「実践体制」「実践方法・プログラム」という3つの論点から整理を試みた。その後、前回同様に調査の進め方について検討した。

第5回研究会

日程：2022年10月24日

会場：オンライン

報告者：①早坂聡久（分）、②小櫃俊介（客）・大洞菜穂美（客）

テーマ：①社会福祉法人の経営指向性に関する研究

②社協の記録システムについて（北区社会福祉協議会プレ調査報告）

概要：①社会福祉法人の経営状況・経営指向に関する大規模調査に基づき、地域公益活動の実施状況等についての分析について報告された。収益規模や充実残額の有無、事業分野と公益活動の実施状況の関係等について考察された。②社会福祉協議会（社協）の間では、ソフトの導入により、従来紙媒体であった相談援助（コミュニティソーシャルワーク等）、有償サービス、成年後見・権利擁護事業等の記録のIT化が広がっている。大学近辺の導入事例にプレ調査として行ったヒアリングについて報告された。

第6回研究会

日程：2022年11月25日

会場：オンライン

報告者：①洪心璐（分）・小櫃俊介（客）・大洞菜穂美（客）、②小櫃俊介（客）・大洞菜穂美（客）

テーマ：①九州出張報告：ICT研究に伴う先進事例の視察について

②社協の記録システムについて（文京区社会福祉協議会プレ調査報告）

概要：①10月31日～11月1日に行った福岡市社協、福岡市、うすき石仏ネット（臼杵市）の視察・ヒアリン

グの内容について報告された。タブレット端末を用いた地域見守り活動、地域包括ケアシステムにおける情報一元化・発信のシステム等について先進的な取組みであった。②前回に続き、社協の記録システム導入についてのヒアリングの結果についてその後の検討経過が報告された。

第7回研究会

日 程：2022年12月23日

会 場：オンライン

報告者：加山弾（分）

テーマ：板橋区、北区のCSW実践記録のICT化に関する共同研究について

概 要：社協の記録システムについての前回までのヒアリング報告をふまえ、社協の記録化・ICTによる一元化についてかねてより協議のあった板橋区・北区と事前に打ち合わせを行い、それに基づいて今後の研究の可能性や方向について検討した。

第8回研究会

日 程：2023年3月8日

会 場：赤羽台キャンパスWELLB-HUB 2 20305教室

ゲスト：社会福祉法人板橋区社会福祉協議会・社会福祉法人北区社会福祉協議会

テーマ：板橋区、北区のCSW実践記録のICT化に関する共同研究について

概 要：本研究会は、2023年度から始動する、板橋区・北区両社会福祉協議会との共同研究である、社協CSW実践記録のICTによる一元化のための打ち合わせと、研究内容のすり合わせのために実施された。当研究グループからは第8回研究会で検討した内容とこれまでの研究蓄積、両社協からは一元化・集計・分析したい記録類等の資料を持ち寄り、今後の研究の方向について検討した。

公開研究会

日 程：2023年1月21日

会 場：オンライン

テーマ：ICTを活用した地域の見守り・交流の取組み

報告者：①福岡市社会福祉協議会 事業開発課長 栗田将行 氏

②加山弾（分）・早坂聡久（分）・小櫃俊介（客）・大洞菜穂美（客）

概 要：①10月の視察の目的であったタブレット端末を活用した「見守り・交流アプリ」による高齢者の地域自立生活支援の先進事例について報告を受け、討議した。②今年度の地域福祉グループ研究活動のあらましを報告し、次年度以降の研究計画についてより多くの関係者・関心者と協議した。

2 視察・研修会参加等

(1) 福岡県・大分県視察

日 程：2022年10月31日～11月1日

場 所：①福岡市社会福祉協議会、②福岡市役所、③臼杵市医師会立コスモス病院

参加者：加山弾（分）・洪心璐（分）・大洞菜穂美（客）・小櫃俊介（客）

概 要：①ICTを活用した地域の見守り・交流の取組み、②ビッグデータを活用した地域包括ケアシステム（情報プラットフォーム）、③市内の医療・介護機関を結ぶ情報ネットワークについて視察・ヒアリングを行った。

(2) 栃木県視察

日 程：2023年2月17日～18日

場 所：①社会福祉法人同愛会（栃木県那須郡）・②国際医療福祉大学

参加者：洪心璐（分）・大洞菜穂美（客）・小櫃俊介（客）

概 要：①社会福祉法人の地域公益活動について、どのように地域住民と共に取り組んでいるかヒアリングを行った。②同大学からオンライン配信される日本地域福祉学会関東甲信越静部会研究集会「栃木発・地域共生社会の現在地」に参加した。県内の重層的支援体制整備事業の実施状況や先駆的な地域福祉実践（にしなすケアネット）の事例についての報告であった。

(3) 大阪府視察

日 程：2023年3月9日～10日

場 所：①大阪府社会福祉協議会、②大阪府内社会福祉法人（2か所）

参加者：加山弾（分）・山本美香（分）・早坂聡久（分）・小櫃俊介（客）・大洞菜穂美（客）

概 要：大阪府内すべての社会福祉法人・社会福祉施設が加盟して構築されている「大阪しあわせネットワーク」（大阪府社会福祉協議会が事務局）の事業内容及び当該事業の今後の在り方についてヒアリングを行った。「大阪しあわせネットワーク」に加盟し、地域貢献事業を展開している2施設を訪問し、事業実施に至る経緯と、地域ニーズに対応した地域貢献活動を施設内で構築するポイントを確認した。

3 論文・学会発表等

（書籍）

書 名：単身高齢者の居住支援—コミュニティソーシャルワークの意義と機能

著 者：洪心璐（分）

出版社：御茶の水書房

出版日：2023年1月

（論文）

題 目：社会的孤立をめぐる地域福祉政策・実践の動向と課題
—自治体と専門職の裁量権に着目して—

著 者：加山弾（分）

書 名：社会福祉研究第144号

出版日：2022年8月1日

題 目：外国籍住民と共に暮らすこととは－生活者としてのニーズを知る－

著 者：加山弾（分）

書 名：民生委員・児童委員のひろば10月号

出版日：2022年10月

題 目：社会福祉法人の地域公益活動をめぐる近年の政策・実践・研究の動向

著 者：加山弾（分）

書 名：東洋大学社会学部紀要第60-1号

出版日：2022年11月

題 目：複数の社会福祉法人の連携による地域公益活動の実践形態および課題に関する研究

著 者：加山弾（分）

書 名：地域ケアリングVol.24 No.13

出版日：2022年11月

題 目：2021年度学界回顧と展望：地域福祉部門

著 者：加山弾（分）

書 名：社会福祉学Vol.63-3

出版日：2022年11月

題 目：コロナ禍で顕在化した生活課題と地域福祉

著 者：加山弾（分）

書 名：滋賀社会福祉研究第25号

出版日：2023年2月

題 目：住宅セーフティネット政策～生活困窮者のための住宅政策とは

著 者：山本美香（分）

書 名：DIO 連合総研レポート

出版日：2022年3月

題 目：居住支援から考える地域共生社会～生活困窮者支援を中心に

著 者：山本美香（分）

書 名：JL News No.140 日本発達障害連盟

出版日：2022年3月

題 目：社会福祉法人の経営状況にみる課題と展望

著 者：早坂聡久（分）

書 名：ライフデザイン学研究第18号

出版日：2023年3月

題 目：中山間地域における多世代交流による介護予防の実践

—A市B地区での取り組みを中心とした事例分析—

著 者：洪心璐（分）

書 名：東洋大学社会学部紀要第60-1号

出版日：2022年11月

題 目：コロナ禍における社会福祉法人によるICT等利活用の効果と課題

—フォーカスグループインタビューの調査から—

著 者：洪心璐（分）・大洞菜穂美（客）

書 名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

題 目：市町村による居住支援のネットワーク構築に向けた支援の現状と課題

—大分県における住宅セーフティネットの取組みに着目して—

著 者：洪心璐（分）

書 名：東洋大学社会学部紀要第60-2号

出版日：2023年3月

題 目：社会福祉法人と企業の連携—地域貢献活動を通して—

著 者：大洞菜穂美（客）

書 名：鴨台社会福祉学論集第31号

出版日：2023年3月

（学会）

題 目：ICT・介護ロボット導入状況と課題について

報告者：早坂聡久（分）

学 会：第36回日本地域福祉学会大会

日 程：2022年6月12日

概 要：東京都内開設の特別養護老人ホームへの調査（有効回収94件）を実施し、ICT・介護ロボットの導入状況及び今後の意向を明らかにし、ICT・介護ロボットの効果的活用を導く好循環を構築の必要性を

報告した。

題 目：介護経営法人の財務状況の課題

報告者：早坂聡久（分）

学 会：第30回日本介護福祉学会大会

日 程：2022年10月9日

概 要：社会福祉法人の財務諸表等電子開示システムに公開されている2019（令和1）年度決算データから高齢者福祉事業を収益の柱とする法人の経営状況を分析し、法人経営の課題を報告した。

題 目：社会福祉法人の経営指向性に関する研究

報告者：早坂聡久（分）

学 会：日本社会福祉学会第70回秋期大会

日 程：2022年10月16日

概 要：社会福祉法人への経営指向性に関する調査（有効回収713件）を実施し、事業区分、事業規模のみならず、経営環境や地方公共団体との関連性の中で、異なる経営指向性を同時に内在させていることを報告した。

題 目：シンポジウム：子ども家庭総合支援の将来

子ども家庭支援センター創設から切れ目のない支援を考える

—保育所・子ども園が担う役割 変わること／変わらぬこと—

報告者：早坂聡久（分）

学 会：淑徳大学社会福祉学会第32回大会

日 程：2022年11月26日

概 要：支援が必要な子育て家庭と福祉施策のインターフェースの課題と、保育所・子ども園が担う役割について発表した。

題 目：社会福祉法人における ICT 等利活用の現状と課題

—担当者へのフォーカス・グループ・インタビューを通して—

報告者：洪心璐（分）・大洞菜穂美（客）

学 会：第36回日本地域福祉学会大会

日 程：2022年6月12日

概 要：社会福祉法人の施設・事業所は社会福祉事業と地域福祉活動においてどのようにICT等を利活用しているか、その効果と課題について報告を行った。

題 目：住民と行政職員による「連携」や「協同」に対する認識の「差」

—中山間地域にて住民と行政職員が共同作業を実施する場合に必要な視点—

報告者：熊谷大輔（昭和女子大学）・井上登紀子（一般社団法人ORINAS）

小櫃俊介（客：一般社団法人ORINAS）

学 会：第36回日本地域福祉学会大会

日 程：2022年6月12日

概 要：A県B町における地域共生ケアシステム構築に向けた、住民と行政職員による「協同意識」や「コミュニティ意識」に対する認識に対する「差」における調査を検証したことについて共同で発表を行った。

題 目：A県内の介護サービス事業者が抱く外国人介護職員の受け入れ課題
—A県全域調査からの一考察—

報告者：熊谷大輔（昭和女子大学）・小櫃俊介（客：一般社団法人ORINAS）

学 会：第30回日本介護福祉学会大会

日 程：2022年10月9日

概 要：A県老人福祉協会実施の県内介護事業者施設を対象とした外国人介護職員への意識調査の自由記述テキストデータの分析を行い、地方都市の介護サービス事業者が抱く外国人介護職員の受け入れに対する課題を考察したことについて共同で発表を行った。

実践研究ユニット：地域包括ケアグループ

1 研究会の開催

第1回研究会

日 程：2022年6月6日

会 場：オンライン

登壇者：春田淳志 氏（慶應義塾大学医学部医学教育統轄センター、日本プライマリ・ケア学会認定家庭医療専門医・指導医、日本医学教育学会認定医学教育専門家）

テーマ：地域包括ケアシステムにおける協働—多職種連携コンピテンシーからみえてくるもの—

概 要：本研究会では、春田淳志氏を招聘し、『地域包括ケアシステムにおける協働—多職種連携コンピテンシーからみえてくるもの—』をテーマにご講演いただいた。地域包括ケアシステムの中では、医療は「病気を治療する」という概念から「暮らしを支え健康を守る」という概念に変化してきているとし、地域共生社会における多職種連携についての必要性が説明された。当グループは次年度以降、都市の地域包括ケアの課題等を検証するためのフォーカスグループインタビュー調査を実施する予定となっている。本研究会では、インタビュー調査に向けた知見を得るとともに、地域包括ケアにおける医療 - 福祉の連携、専門職種間の連携の在り方に関し、活発な意見交換が行われた。

第2回研究会

日 程：2022年12月16日

会 場：オンライン

登壇者：世田谷区職員

テーマ：世田谷区の地域包括ケアシステムにおける実践について

概要：本研究会では世田谷区の2名の職員を招聘し、『世田谷区地域包括ケアシステムにおける実践について』をテーマにご講演いただいた。まず、世田谷区保健福祉政策課の有馬氏より、世田谷区の目指す地域包括ケアシステムとその実践について、世田谷区における地域包括ケア事業、重層的支援体制整備事業における取り組みの概要をご説明いただいた。続いて、保健福祉センター保健福祉課の澁田氏より、具体的に世田谷区がどのようにかかわっているか、事例を挙げて地域包括ケアの地区展開のご説明をいただいた。質疑応答では研究員からの質問に具体例を挙げながら説明され、活発な議論を行うとともに、実際の取り組み事例を学ぶ貴重な機会となった。

第3回研究会

日程：2023年1月26日

会場：オンライン

登壇者：宮島俊彦氏（兵庫県立大学客員教授、日本製薬団体連合会理事長、元厚労省老健局長）

テーマ：オンライン地域包括ケアの可能性

概要：本研究会では、宮島俊彦氏を招聘し、地域包括ケアシステムの内容と絡めながら『医療・介護DXの方向』をテーマにご講演いただいた。少子高齢社会を起因とした社会保障費の逼迫と現行政策での課題などを踏まえ、地域包括ケアシステムにおいて、ロボットやICTを活用した効率的な支援を行っていく必要があることが指摘された。また、それをどのように政策に落とし込んでいくか、その時の課題は何かなど政策的な観点からの考察も加え、説明された。本研究会は、世田谷区の職員など、地域包括ケアシステムに関わる事業担当者らにも公開されていたため、現場レベルでの課題など積極的な発言や質問が行われ、活発な議論が行われた。

地域包括ケアG・地域福祉G 合同研究会

日程：2023年2月3日

会場：オンライン

ゲスト：古都賢一氏（社会福祉法人全国社会福祉協議会副会長）

テーマ：社会福祉協議会と地域包括ケアシステム

概要：本研究会は、地域福祉グループとの共同研究会として開催され、古都賢一氏を招聘し、『社会福祉協議会と地域包括ケアシステム』をテーマにご講演いただいた。地域包括ケアシステムが地域においてどのように展開されているのか、そこに社会福祉協議会がどのように関わっているのかを具体的な社会福祉協議会の実践事例と共に説明された。地域福祉の実践において、どのように、どの分野と連携・協働をしていくのか、社会福祉協議会に求められる役割や機能はどこになるのか、どのような取り組みが必要なのかについて活発な意見交換が行われた。

2 論文・学会発表等

(論文)

題 目：国内における在宅高齢者に対する意思決定支援に関する文献レビュー

著 者：藤澤美保 (客)

書 名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

実践研究ユニット：子どもグループ

1 各種研究会の開催

テーマ：非正規滞在の子どもの時代

日 程：2022年10月19日

会 場：オンライン

ゲスト：石井陽介氏 聞き手：南野奈津子 (分)

主 催：滞日外国人支援を考える会 (代表：南野奈津子)

共 催：東洋大学福祉社会開発研究センター

概 要：日本社会において、子ども時代を非正規滞在者 (母親が外国籍のケース) として過ごすことは、本人にとってどのような体験なのか、その経験が現在に与える影響とは何か、ゲストスピーカーと参加者でディスカッションを行い、議論を深めた。

テーマ：日本で暮らすロヒンギャの子どもたち

日 程：2022年10月29日

会 場：オンライン

ゲスト：長谷川留理華氏

概 要：現在、日本には群馬県館林市などに400人ほどのロヒンギャの人たちが居住している。イスラム教徒であるロヒンギャの子どもたちが日本で暮らす中で直面する課題について学び、外国にルーツをもつ子どもたちの多様な権利を守るためにはどうすればいいのか、議論を深めた。

テーマ：世田谷区当事者主体の保育・相談支援研究報告会

日 程：2023年1月27日

会 場：上用賀アートホール (オンラインで世田谷区内公立保育所、認可保育所などへの配信)

担 当：森田明美 (客)、小林恵一 (客)、上田美香 (客)、我謝美左子 (客)、宮崎静香 (客)

テーマ：外国人住民への子育て支援白書 報告シンポジウム

妊娠から就学前までの外国人家庭への子育て支援に関する東海地方の実態調査報告

日 程：2023年2月16日

会 場：オンライン

講 師：NPO外国人・多文化共生ネット 坂本久海子 氏、米勢治子 氏、松本一子 氏、川崎直子 氏、
米田奈緒子 氏

担 当：内田千春（分）

テーマ：東日本大震災子ども・若者支援 シンポジウム

日 程：2023年2月27日

会 場：宮城県議会

主 催：一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センターと宮城県議会議員こども政策研究会

共 催：東洋大学福祉社会開発研究センター

担 当：森田明美（客）、清水冬樹（客）

2 地域連携活動

子どもグループは、実践研究ユニットとして、研究協力地域との互恵的な関係をつくりながら、研究を進めている。2021年度までの協力関係を継続することができた東京都世田谷区と福祉社会開発研究センターの間に協定を結び活動した。東京都北区と東洋大学の間の包括連携協定の元で、区内の保護者団体、保育関連団体との協力関係を少しずつ深めることができた。

どちらの地域連携についても、2023年度以降も継続の予定である。なお、研究員の個人的な協力関係に基づいた活動についてはここには記載していない。

さらに、前年度までのプロジェクトの継続研究活動として、東日本大震災子ども・若者支援活動を継続している。

(1) ポケトーク等のICT機器の保育実践現場での活用

2022年6月24日	研究依頼説明（区立保育園1）	尹、麗麗、森田、内田千
2022年7月21日	研究依頼説明（区立保育園2）、 保育観察	尹、麗麗、内田千
2022年11月10日	研究調査（区立保育園1）	麗麗
2022年11月18日	研究調査（区立保育園2）	麗麗
2022年12月21日	保護者・保育者インタビュー	麗麗
2022年12月26日	保護者・保育者インタビュー	麗麗
2023年1月11日	保護者・保育者インタビュー	麗麗
2023年2月13日	保護者・保育者インタビュー 保育観察	麗麗
2023年2月16日	保護者・保育者インタビュー 保育観察	麗麗、森田
2023年3月	保育者へのフォローアップ	麗麗、内田千

調査の現状と成果：

母語を日本語としない乳幼児に対して、子ども自身が遊具のように使用できるICTツールを導入することによって、乳幼児期の子どもの言語コミュニケーションがどのように変化するのかを検証した。

調査方法は、ポケトーク©（通信機能が付き、100国以上の言葉を自由に通訳機器）を使用して調査を進めている。保護者の了承を得て、保育士が各園で通訳が必要な子どもに対して使用したり、子ども自身にポケトークを使わせたりするなどして実践での活用を試みてもらった。また保護者了承を得た上で必要な場合、保護者とのコミュニケーションにポケトークを使用して、コミュニケーションを図るようにしてもらった。

保育での使用場面は、保育室、園庭など、使用時に気づいた点を保育士が記録し、インタビュー時等に報告を受けた。保育士からの報告をもとに、支援の必要性、求められている支援について検討している。

(2) 世田谷区との提携・連携活動

① 保育の在り方を中心とした共同研究をすすめるための研究会

開催：第1回6月27日、第2回7月22日、第3回8月26日、第4回9月26日、第5回10月21日、第6回12月16日の計6回

担当：森田明美（客）、小林恵一（客）、上田美香（客）、我謝美左子（客）、宮崎静香（客）

概要：夜間原則17時～19時の時間帯でオンラインを活用し、世田谷区関係者委員（保育育成班、子ども改定支援センターなど行政：5人、区立保育所長：10人、子育てコーディネーターなど合計20人程度）と、研修、実践の振り返りと計画立案などを行った。

② 世田谷区保育ネットへの参加、協力

日程	場所	担当者	参加者数	内容
2022年5月19日	給田保育園	森田明美（客）	40人	世田谷区公立保育所の地域活動の進め方について、取り組み事例を当事者主体の相談支援（その5）報告書を使用して説明
2022年9月15日	給田保育園	森田明美（客）	40人	世田谷区で進める当事者主体の保育語りたいことシートの説明と活用方法について説明
2022年11月30日	北烏山 なごみ 保育園	森田明美（客）	45人	地域の民間保育施設などの人たちに、国と東京都のこども基本条例と行政組織の話と、当事者主体の保育についてエピソード記録の書き方と活用について説明し今後の課題を意見交換

③ 世田谷区保育施設への支援・指導の在り方検討

担当：委員長 森田明美（客）、上田美香（客）

日程：4回（5月30日、6月29日、7月25日、8月24日）

経緯：世田谷区が2022年4月に設置した「保育施設への支援・指導のあり方検討会」に専門委員としてかかわった。

成果：とりまとめとして『保育施設への支援・指導のあり方検討会における外部有識者の検討報告および今後の区の実践について』（2022年8月29日付）の執筆に関与。

担当：森田明美（客）

日程：第1回10月18日、第2回12月13日

経緯：継続して区職員が保育の在り方を考えるために設置された「世田谷区保育施策推進会議」に森田が外部オブザーバーとしてかかわった。

成果：区立保育所での不適切保育が顕在化した2021年度に保育の質を上げて、二度と不適切な保育が行われ

ないような仕組みを考えたが、不適切保育につながる実態が顕在化したことから、改めて保育の在り方を300以上ある保育施設すべてへの行き届いた支援方法を考えることを目的として検証作業に加わった。保育の質について運営形態を超えてあげるとは大変難しい。環境の整備、職員育成支援、組織の検討など多様な検証が求められる総合的な仕組みづくりにかかわっていくことにした。

2023年3月15日 世田谷区アドバイザー会議（子ども家庭課 世田谷区役所）

出席予定：森田（客）・上田（客）・我謝（客）

④ 世田谷区児童福祉研修への協力

以下の研修会の前後に2～3回、世田谷区との打ち合わせをオンラインで実施している。

児童福祉研修Ⅰ（保育課・区立保育園）

担 当：森田（客）・小林（客）

日 程：7月21日

会 場：セミナーハウス

参加者：58名

児童福祉研修Ⅱ

担 当：森田（客）・上田（客）・我謝（客）・宮崎（客）

日 程：9月26日（第1回：保育課・区立保育園対象）

10月21日（第2回：保育課・区立及び私立保育園対象）

会 場：梅丘パークホール

参加者：56人（第1回）、87人（第2回）

⑤ 母子生活支援施設ガイドライン実践に向けた研修（子ども家庭課・母子生活支援施設）

担 当：森田（客）・上田（客）・我謝（客）

日 程：10月7日（第1回）、11月18日（第2回）、1月27日（第3回）、2月20日（第4回）

会 場：パルメゾン上北沢（第1回、第2回）、三茶しゃれなードホール（第3回、第4回）

参加者：11人（第1回、第2回）、22人（第3回、第4回）

⑥ 世田谷区内のその他の活動

【世田谷区制施行90周年行事：子ども条例と子どもの権利に関するシンポジウム】

担 当：森田明美（客）

日 程：11月5日（後日YouTubeで配信）

会 場：北沢タウンホール

参加者：100人

成 果：森田（客）が基調講演および、区長、若者や区民とのシンポジウムの司会をおこなった。世田谷区制90年を迎えるにあたり、ちょうども条例20年でもあることから、区政における子ども施策20年の取り組みを検証した。8つの点に絞って評価検証したが、シンポジウムではそれを踏まえて、若者たちその成果と課題の中で成長したことを語ってくれて課題を鮮明にすることができた。

【Bangladesh国社会保障制度の研修支援】

講 義：日本の子ども福祉法制度と支援

担 当：森田明美（客）

日 程：11月9日

会 場：三菱UFJ研修室

参加者：Bangladesh内閣府職員13人、アジア開発銀行2人

成 果：発展途上にあるBangladeshはまだ社会保障は公的扶助しかない。そうした中で、国づくりのために新しい社会保障を考える人材育成が必須であり、アジアで、様々な課題を抱える日本の子ども福祉施策を体系的に講義し、それを踏まえて、女性の社会進出や少子化を克服するために必須である保育施設を見学してもらったことは価値があった。また、よき至誠こども園の視察の調整協力と見学に同行して質問に答えた。

(3) 東京都北区との連携活動

① 北区保育園連合会との連携打ち合わせ

日程	場所	担当者	参加者数	内容
2022年8月30日	WELLB-Hub2	高橋健介 内田千春	16	北区私立保育園連合会幹部へのオンライン公開保育及び研修の説明と実施可能性の検討
2022年12月8日	北区私立保育園連合会園長会	高橋健介	36	上記の内容を、園長を対象に説明

成果と課題：

今年度はICTを活用した地域内での公開保育を活用した研修の技術的な説明や可能性を、北区内の園長会と情報共有をすることができた。実際に何らかの活動を開始するには、保育園連合会内での調整が必要であり、実現には少し時間がかかる。

② 研究交流会議

テーマ：文化的多様性を支えるペダゴジーと支援活動について

講 師：Gumiko Monobe博士（アメリカ合衆国ケンタッキー州立大学）

日 程：12月19日

参加者：内田千（分）、内田塔（分）、麗麗（客）、他2名

成 果：Monobe博士の実践研究から学び、北区での実践活動のあり方について検討することができた。博士の教員養成課程の授業（履修者15～20人が一般的なクラスサイズ）として、難民が集まっている学校区の各家庭を訪問して学習支援を行い、省察するという課題が紹介された。実際にかかわる機会

がある前と後で、受講学生の家庭訪問活動への考え方が劇的に変わり、教員として現場に入ってから、家庭の言語が英語以外の子どもたちを積極的に受け入れ家族とかかわっているという。訪問された子どもたちの側では、将来に「大学」「学習することの価値」が位置付けられるという良さもあることがわかった。参加者からは、北区で展開する「子どもの居場所づくり」活動を始めとして、研究員がそれぞれ関わっている、様々な国の背景を持つ子どもたちを支援する活動について報告し、意義や課題、研究としての進め方等議論を深めた。

(4) 東日本震災復興プロジェクト

日程	内容	場所	担当	外部参加
2022年4月14日	研究会／第1回東日本大震災子ども・若者支援センター運営会議	オンライン	森田（客） 清水（客）	4人
2022年5月12日	研究会／第2回東日本大震災子ども・若者支援センター運営会議	オンライン	森田（客） 清水（客）	4人
2022年5月12日	復興庁（宮城復興局）ヒアリング	宮城復興局	清水（客）	6人
2022年6月9日	研究会／第3回東日本大震災子ども・若者支援センター運営会議	オンライン	森田（客） 清水（客）	4人
2022年6月18日	保育者向けSV（東日本大震災子ども・若者支援センター保育カフェ）	宮城学院女子大学	清水（客）	10人
2022年7月1日	石巻市子育て世代包括支援センターヒアリング	石巻市子育て世代包括支援センター issyo	清水（客）	5人
2022年7月2日	保育者向けスーパーバイズ（東日本大震災子ども・若者支援センター保育カフェ）	仙台レインボーハウス	清水（客）	10人
2022年7月14日	研究会／第4回東日本大震災子ども・若者支援センター運営会議	オンライン	森田（客） 清水（客）	4人
2022年8月6日	保育者向けスーパーバイズ（東日本大震災子ども・若者支援センター保育カフェ）	仙台レインボーハウス	清水（客）	10人
2022年9月3日	保育者向けスーパーバイズ（東日本大震災子ども・若者支援センター保育カフェ）	仙台レインボーハウス	清水（客）	10人
2022年9月6日	研究会／第5回東日本大震災子ども・若者支援センター運営会議	オンライン	森田（客） 清水（客）	4人
2022年9月15日	研究会／第6回東日本大震災子ども・若者支援センター運営会議	オンライン	森田（客） 清水（客）	4人
2022年10月4日	研究会／第7回東日本大震災子ども・若者支援センター運営会議	オンライン	森田（客） 清水（客）	4人
2022年10月7日	仙台レインボーハウス ヒアリング	オンライン	森田（客） 清水（客）	1人
2022年10月13日	宮城県庁 ヒアリング	宮城県庁・宮城県議会	森田（客） 清水（客）	3人
2022年10月28日	飯能市子育て世代包括支援センター、ならびに山手保育所等ヒアリング	飯能市子育て世代包括支援センター 山手保育所	森田（客） 清水（客） 麗麗（客） 我謝（客）	10人
2022年11月5日	保育者向けスーパーバイズ（東日本大震災子ども・若者支援センター保育カフェ）	仙台レインボーハウス	清水（客）	10人
2022年11月7日	研究会／第8回東日本大震災子ども・若者支援センター運営会議	オンライン	森田（客） 清水（客）	4人
2022年12月5日	研究会／第9回東日本大震災子ども・若者支援センター運営会議	オンライン	森田（客） 清水（客）	4人
2022年12月23日	西東京市・和光市子育て世代包括支援センターヒアリング	西東京市子育て世代包括支援センター 和光市子育て世代包括支援センター	森田（客） 清水（客） 上田（客） 我謝（客）	10人

論文・学会発表等

(報告書)

書名：当事者主体の相談支援（その6）

—世田谷区児童福祉課題を抱える家庭への保育園等の支援研究報告書—

著者：森田明美（客）、小林恵一（客）、我謝美左子（客）、上田美香（客）

出版日：2023年3月31日

(論文)

題目：[大会企画シンポジウム3] 危機と回復への家族支援

震災から10年、パンデミックのさなかで「市民社会による継続的支援の価値」

著者：清水冬樹（客）

書名：家族療法研究第39巻2号

出版日：2022年

題目：自己責任を内包するオンラインを通じた相談に関する研究

—コロナ禍における子育て実態調査を手がかりに—

著者：清水冬樹（客）

書名：福祉社会開発研究第15号

出版日：2023年3月

(学会発表：国内)

題目：被災地における継続的な子育て支援に関する研究

—中高生時代に東日本大震災で被災した経験がある保護者への量的調査を手がかりにして—

報告者：森田明美（客）、清水冬樹（客）

学会：日本社会福祉学会第70回秋季大会

日程：2022年10月15日～16日

開発研究ユニット

1 論文・学会発表等

(書籍)

題 目 : Human Models Simulating the Physical Conditions of the Elderly Individual and Standing Assistance Method Based on These Models

著 者 : Daisuke Chugo, Yuya Miyazaki, Satoshi Muramatsu, Sho Yokota, Jin-Hua She and Hiroshi Hashimoto

書 名 : CLAWAR 2022: Robotics in Natural Settings, Lecture Notes in Networks and Systems, vol 530. Springer

出版日 : 2022年8月25日

(査読付国際会議論文)

題 目 : Development of cart with constant steerability regardless of loading weight or position : 1st Report: Proposal of an active steering caster and its arrangement

著 者 : S. Aoki, S. Yokota, A. Matsumoto, D. Chugo, S. Muramatsu and H. Hashimoto

学 会 : IECON 2022 - 48th Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society

日 程 : 2022年10月17日～ 20日

会 場 : ベルギー・ブリュッセル, Convention Center SQUARE

題 目 : Effect of Embodiment and Improving Japanese Students' English Pronunciation and Prosody with Humanoid Robot

著 者 : E. Krisdityawan, S. Yokota, A. Matsumoto, D. Chugo, S. Muramatsu and H. Hashimoto

学 会 : 2022 15th International Conference on Human System Interaction (HSI)

日 程 : 2022年7月28日～ 31日

会 場 : オーストラリア・メルボルン, La Trobe University

(国内学会発表予稿)

題 目 : 音声の音響情報から話者の感情を推定するための基礎実験

著 者 : 瀬沼涼・横田祥(分)・松元明弘・中後大輔・橋本洋志

学 会 : 第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会

日 程 : 2022年12月14日～ 16日

会 場 : 幕張メッセ国際会議場

題 目 : VR剣道稽古システムのためのコントローラ型竹刀の重量検討

著 者 : 西郷優希・横田祥(分)・松元明弘・中後大輔・橋本洋志

学 会 : 第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会

日 程：2022年12月14日～16日

会 場：幕張メッセ国際会議場

題 目：起立動作中の上半身支持を考慮したロボット

著 者：渡邊健太・中後大輔・村松聡・横田祥 (分)・余錦華・橋本洋志

学 会：第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会

日 程：2022年12月14日～16日

会 場：幕張メッセ国際会議場

題 目：下肢力を利用した体幹の回旋を誘導する歩行促進装具のアシストトルクの検討

著 者：大木治宇・横田祥 (分)・松元明弘・中後大輔・橋本洋志

学 会：第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会

日 程：2022年12月14日～16日

会 場：幕張メッセ国際会議場